

[D年] 聖霊降臨節第10主日(2024年7月21日)**【旧約聖書日課】列王記上 17章8～16節**

8また主の言葉がエリヤに臨んだ。9「立ってシドンのサレプタに行き、そこに住め。わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる。」
10彼は立ってサレプタに行った。町の入り口まで来ると、一人のやもめが薪を拾っていた。エリヤはやもめに声をかけ、「器に少々水を持って来て、わたしに飲ませてください」と言った。11彼女が取りに行こうとすると、エリヤは声をかけ、「パンも一切れ、手に持って来てください」と言った。
12彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。わたしには焼いたパンなどありません。ただ壺の中に一握りの小麦粉と、瓶の中にわずかな油があるだけです。わたしは二本の薪を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです。」
13エリヤは言った。「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。14なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。

主が地の面に雨を降らせる日まで

壺の粉は尽きることなく

瓶の油はなくならない。」

15やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。こうして彼女もエリヤも、彼女の家の者も、幾日も食べ物に事欠かなかった。16主がエリヤによって告げられた御言葉のとおり、壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくならなかった。

【使徒書日課】**ローマの信徒への手紙 14章10～23節**

10それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。11こう書いてあります。

「主は言われる。

『わたしは生きている。

すべてのひざはわたしの前にかがみ、

すべての舌が神をほめたたえる』と。」

12それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです。

13従って、もう互いに裁き合わないようにしよう。むしろ、つまずきとなるものや、妨げとなる

ものを、兄弟の前に置かないように決心しなさい。
14それ自体で汚れたものは何もないと、わたしは主イエスによって知り、そして確信しています。汚れたものだと思うならば、それは、その人にだけ汚れたものです。15あなたの食べ物について兄弟が心を痛めるならば、あなたはもはや愛に従って歩いていません。食べ物のことで兄弟を減ぼしてはなりません。キリストはその兄弟のために死んでくださったのです。16ですから、あなたがたにとって善いことがそしりの種にならないようにしなさい。17神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。18このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々に信頼されます。19だから、平和や互いの向上に役立つことを追い求めようではありませんか。20食べ物のために神の働きを無にしてはなりません。すべては清いのですが、食べて人を罪に誘う者には悪い物となります。21肉も食べなければぶどう酒も飲まず、そのほか兄弟を罪に誘うようなことをしないのが望ましい。22あなたは自分が抱えている確信を、神の御前で心の内に持っていない。自分の決心にやましさを感ぜない人は幸いです。23疑いながら食べる人は、確信に基づいて行動していないので、罪に定められます。確信に基づいていないことは、すべて罪なのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章22～27節

22その翌日、湖の向こう岸に残っていた群衆は、そこには小舟が一そうしかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気づいた。23ところが、ほかの小舟が数そうティベリアスから、主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所へ近づいて来た。24群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。25そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。26イエスは答えて言われた。「はつきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べた満腹したからだ。27朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

列王記上 17章8～16節

8主の言葉がエリヤに臨んだ。9「すぐにシドンのサレプタへ行って、そこに身を寄せなさい。私はそこで一人のやもめに命じて、あなたを養わせる。」10そこでエリヤは、すぐにサレプタへ向かった。町の入り口まで来ると、そこで一人のやもめが薪を捨てていた。エリヤは彼女に声をかけて言った。「器に少し水を持って来て、私に飲ませてください。」11そこで彼女が水を取りに行こうとすると、エリヤは呼び止めて言った。「どうかパンも一切れ持って来てください。」12すると彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。私には、焼いたパンなどありません。かめの中に一握りの小麦粉と、瓶に少しの油があるだけです。見てください。私は二本の薪を拾って来ましたが、これから私と息子のために調理するところです。それを食べてしまえば、あとは死ぬばかりです。」13エリヤは言った。「心配は要りません。帰って行き、あなたが言ったとおりに調理しなさい。だが、まずそれで、私のために小さなパン菓子を作り、私に持って来なさい。その後で、あなたと息子のために作りなさい。14なぜならイスラエルの神、主はこう言われるからです。『主がこの地に雨を降らせる日まで、かめの小麦粉は尽きず、瓶の油がなくなることはない。』15やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。それで、彼女もエリヤも、彼女の家の者も幾日も食べることができた。16主がエリヤを通して告げられた言葉どおり、かめの小麦粉は尽きず、瓶の油がなくなることもなかった。

ローマの信徒への手紙 14章10～23節

10それなのに、なぜあなたは、きょうだいを裁くのですか。また、なぜ、きょうだいを軽んじるのですか。私たちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。11こう書いてあります。

「主は言われる。

『私は生きている。

すべての膝は私の前にかがみ、

すべての舌は、神をほめたたえる』と。」

12それで、私たちは一人一人、自分のことについて神に申し開きすることになるのです。

13従って、もう互いに裁き合うのはやめましょう。むしろ、つまずきとなるものや、妨げとなるものを、きょうだいの前に置かないように決心しなさい。14私は主イエスにあって知り、確信してい

ます。それ自体で汚れたものは何一つありません。汚れていると思う人にとってだけ、それは汚れたものになるのです。15食べ物のために、きょうだいが心を痛めているなら、あなたはもはや愛に従って歩んではいません。食べ物のことで、きょうだいを減ぼしてはなりません。キリストはそのきょうだいのために死んでくださったのです。16ですから、あなたがたにとって善いことが、そしりの種にならないようにしなさい。17神の国は飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。18このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、また人に信頼されます。19だから、平和に役立つことや、互いを築き上げるのに役立つことを追い求めようではありませんか。20食べ物のために、神の業を無にしてはなりません。すべての物は清いのです。しかし、つまずきを自覚しながら食べる者にとっては、悪いのです。21肉も食べず、ぶどう酒も飲まず、何であれ、きょうだいがつまずくことをしないことが良いことなのです。22あなたは自分の持っている信仰〔別訳→確信〕を、神の前で持ち続けなさい。自ら良いと認めたことについて、自分を責めない人は幸いです。23しかし、疑いながら食べる人は、罪に定められます。信仰に基づいていないからです。信仰に基づいていないことはすべて、罪なのです。

ヨハネによる福音書 6章22～27節

22その翌日、湖の向こう岸に立っていた群衆は、小舟が一そうしかそこになかったこと、また、イエスが弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気付いた。23ところが、ほかの小舟が数そうティベリアスから、主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所に近づいて来た。24群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜してカファルナウムに来た。25そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「先生、いつ、ここにお出でになったのですか」と言った。26イエスは答えて言われた。「よくよく言うておく。あなたがたが私を捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。27朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもとどまって永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父なる神が、人の子を認証されたからである。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・7月21日「聖霊降臨節第10主日」の日課主題は「命の糧」。

・旧約聖書日課は、「列王記上」から、預言者エリヤがサレプタのやもめのために尽きることのないパンを与えた逸話箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、食べ物のことで互いに裁き合わないようにとの勧告が述べられる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「パンの出来事」と「湖の出来事」の後、「パンの教え」が語り始められる箇所。

旧約日課(列王上 17章より)

・「列王記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第4巻。「ヨシュア記」から始まる「イスラエル正史物語」の終幕を構成するが、時代は「ダビデ王」の最期から南王国の滅亡、バビロン捕囚期までの400年にわたる「王国時代」のほとんどを網羅しており、歴代王の事績を中心とした歴史叙述が中心となっている。その中で例外的な説話物語として置かれているのが、「エリヤ」や「エリシャ」らの預言者物語である。日課箇所は、「エリヤ物語」の中に置かれた預言者の奇跡譚の一つ。

・「列王記」の中で「預言者エリヤの物語」とこれに続く「預言者エリシャの物語」は特異な位置を占めている。「列王記」の他の部分が「歴代王の事績の書」の様式で編集されているのに対して、これらの「預言者の物語」は、ある種の「民話的な英雄譚」の様式を保っている。「エリヤ物語」は、民間伝承で知られていた英雄的預言者の説話伝承群から採用されたものと考えられる。他方、「エリシャ物語」は、北王国イスラエルの後半期を占めた「イエフ王朝」の成立物語と一体化しており、「列王記」全体の構成の中ではより重要な歴史的な位置づけを与えられている。「エリシャ物語」は預言者エリシャが預言者エリヤの弟子・後継者であるとしており、おそらく、「イエフ王朝」樹立の後ろ盾となった「エリシャ」の権威・正統性を示すために、より伝説的な存在である英雄的預言者「エリヤ」の物語が先行して置かれることになったのだろう。

・「預言者エリヤ」は、「ギレアドの住民である、ティシベ人エリヤ」(王上 17:1)と紹介されており、北王国オムリ王朝の第二代王アハブの時代の人物と位置づけられている。オムリ王朝は、前王朝に対するクーデターを軍司令官として鎮圧したオムリが諸侯に担がれる形で王家を形成したとされ、初代オムリ王の時代に山林を開墾して築かれたのが「サマリア」の都だとされている(王上 16章)。オムリ王朝は、フェニキア系諸都市国家と姻戚関係を結ぶなど関係を強め、フェニキア系宗教集団(バアルやアシェラの預言者)を宮廷に引き入れることで経済的基盤を形成したと考えられている。このオムリ王朝に対して、イスラエルの固有の地方聖所宗教集団が対立し、外来のバアル系預言者

集団を排除するにとどまらず、同集団と強く結びついたオムリ王朝を打倒した、というのが、預言者エリヤの時代に起こった「イエフ」によるクーデターと新王朝樹立である。「エリヤ」は、「エリシャ」のように諸地方聖所宗教集団を糾合してサマリア王権に対抗するということまでは至らず、ギレアドの一地方聖所宗教集団の指導者として孤軍奮闘して第二代王アハブや王妃イゼベルと対峙した者として人々に知られ、その逸話が伝えられることになった、と考えられる。そのエリヤ伝承にさまざまな英雄的逸話が含まれるのは、すでに歴史的人物として正確な記録や記憶が失われ、伝説化した人物であったために、典型的な英雄譚にまとめられた帰結と考えられる。

・日課箇所の「サレプタのやもめ」の逸話は、後段に第二幕が続く。日課箇所の第一幕では、飢饉で食べ物が尽きたやもめ親子に尽きない「粉と油」が与えられ食べ物(パン)が得させられるが、第二幕では、その息子が病気となり死んでしまい、エリヤはその息子を生き返らせる奇跡を行う。どちらも、「命の危機に対する再生の奇跡」として位置づけられ、旧新約を通して一貫して繰り返し現れる神学的モチーフを内包している。

使徒書日課(ローマ 14章)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。本書に関しては、資料「聖書と祈りの会 240629」など参照。

・日課箇所を含む14章では、パウロが教会共同体のあり方として「互いに裁き合わない」関係性を基礎とする考えを展開している。そこで彼が具体的に取り上げているのは、「食べ物のこと」での見解の違いに対する互いの態度についてであり、パウロの基本的な考えは、各自が自分の信仰に基づいて「神に感謝して」そうしているのであれば、それを互いに認め合うべきである、というものである。ユダヤ教における「食物規定」は、「割礼」と並んで「ユダヤ教共同体」の一員であることを明らかにする主要な要素であったが、異邦人を教会共同体に迎えるにあたって容易には越えがたい障壁にもなっていた。当時のギリシア・ローマ社会では、多くの肉がギリシア・ローマ系の神殿で祭儀に用いられた後に市場に卸される形で流通していた。肉食に関する厳密な規定を保持するユダヤ人社会では、固有の屠殺法に則って処置された肉を用いることが求められていたので、ユダヤ人は異邦人と食事を共にすることを忌避していた。異邦人信者を受け入れた教会共同体では、この問題がさまざまな波紋をもたらした。パウロは、異邦人が「洗礼」によって教会共同体に加入するに際して、割礼や食物規定を遵守して「ユダヤ人化」する必要がないことを強く主張したが(ガラテヤ書参照)、ユダヤ人信者だけでなく異邦人信者の中にも、割礼を奨励したり、出どころのはっきりしない肉を食べることを忌避する者がいた。

・日課箇所「食べ物」のことや「飲み食い」のことが否定的に扱われているのは、上述の事情があつてのことであり、パウロは、霊的・神的なことに対して肉の・人間的なことを軽視しているわけではないし、割礼や食物規定に関しては、自由で解放された扱いをすべきという考えを示している(Ⅰコリ 8 章)。その上で、パウロは、教会共同体が「食べ物」を巡って互いに裁き合うことがないようにという、より根源的な「愛の共同体」としてのあり方を原則とするために、自分自身の姿勢として、よりこだわりの強い者(信仰の弱い人)の実践に即した扱いを提唱している。

福音書日課(ヨハネ 6 章より)

・日課箇所は、「パンの出来事」および「湖の出来事」に続く「パンの教え」が述べられていく場面の冒頭。この場面には、直前の「パンの出来事」や「湖の出来事」を踏まえた地理的な移動が事細かに説明された上で、これが「カファルナウムの会堂で教えていたとき」(6:59)のことであったという設定が示されている。「パンの出来事」や「湖の出来事」は、共観福音書、特に「マタイ」と「マルコ」が並行して伝えているが、いずれの福音書の記述も地理的移動についての説明が曖昧で、相互に一致しがたい点が含まれる。

・「ヨハネ」は、特異的に一連の出来事の中で「ティベリアス」の地名に触れているが(6:1 および 6:23)、この地名は、新約中で他に本福音書最終章の復活顕現伝承で再度触れられるのみである(21:1)。「ティベリアス」は、元来、ユダヤ人以外の異邦人が住むガリラヤ湖畔の村であったが、ヘロデ大王の後継者の一人でガリラヤの領主となったヘロデ・アンティパスは、この村を破壊した上で再建し、後見人であった皇帝ティベリウスの名を付して領府とし、ガリラヤ地方のユダヤ人を移住させたと伝えられている。紀元 70 年にエルサレム神殿が破壊された後は、ティベリアスがユダヤ・ガリラヤ地方のユダヤ人社会の中心地として機能した。後にラビたちが「タルムード」を編纂したのもこの地だったと伝えられている。「ヨハネ」が、この地名に触れるのは、そのような特異な位置づけを背景にしている可能性がある。「ヨハネの教会」は、サマリア地方、ガリラヤ地方を経てエフェソに拠点を移したと伝えられており、ティベリアスの地との関りは深いと推認される。日課箇所、この地は「カファルナウム」と対置されている。カファルナウムは、ローマ軍団の駐屯地ともなっていたとされる地で、共観福音書では主イエスのガリラヤ伝道の拠点として位置づけられているが、本福音書では、日課箇所以外で主イエスが同地に滞在したとの記述は一箇所のみで(2:12)、数日のこととされている。にもかかわらず、「パンの教え」が「カファルナウムの会堂」で教えられたことであったと強調するのは、これが「ヨハネの教会」の主要な主張ではなく、他の使徒らの教会の主要な教えとの共通点として示すためであったのだろう。

来週の誕生日 (7月 21 日～27 日)

主日礼拝の讚美歌から

- ・21-157「いざ語れ、主の民よ」は、16 世紀に J.カルヴァンらの指導で改革を推し進めたジュネーブ教会で編纂された詩編歌集、いわゆる「ジュネーブ詩編歌」の 124 編として作詞作曲された詩編歌。新共同訳の詩編 124 編に即して韻律化した新訳が歌詞としてあてられている。
- ・21-402「いともとうとき」(= I 502 番)は、19 世紀英国人で福音唱歌作家として信徒伝道活動に励んだキャサリン・ハーンの作詞。曲は、同時代に米国で大衆伝道に携わり多くの福音唱歌を作曲した音楽家ウィリアム・フィッシャーの作曲。大衆伝道運動の中で広く歌われてきた。
- ・21-360「人の目には」は、19 世紀スコットランドの自由教会(非国教会)牧師 W.C.スミスが作詞した原歌詞が改変されながら讚美歌集に採用されてきたもの。曲は、ウェールズ民謡とされるが、詳細は不明。

21-402「いともとうとき」

I Love to Tell the Story

1. I love to tell the story of unseen things above, / Of Jesus and His glory, of Jesus and His love; / I love to tell the story, because I know 'tis true, / It satisfies my longings as nothing else would do.

Refrain:

- I love to tell the story, 'Twill be my theme in glory,
To tell the old, old story. Of Jesus and His love.*
2. I love to tell the story, more wonderful it seems / Than all the golden fancies of all our golden dreams; / I love to tell the story, it did so much for me, / And that is just the reason I tell it now to thee.
 3. I love to tell the story, 'tis pleasant to repeat, / What seems each time I tell it more wonderfully sweet; / I love to tell the story, for some have never heard / The message of salvation from God's own holy Word.
 4. I love to tell the story, for those who know it best / Seem hungering and thirsting to hear it like the rest; / And when in scenes of glory I sing the new, new song, / 'Twill be the old, old story that I have loved so long.

21-360「人の目には」

Immortal, invisible

1. Immortal, invisible, God only wise, / in light inaccessible hid from our eyes, / most blessed, most glorious, the Ancient of Days, / almighty, victorious, thy great name we praise.
2. Unresting, unchanging, and silent as light, / nor wanting, nor wasting, thou rulest in might; / thy justice like mountains high soaring above / thy clouds, which are fountains of goodness and love.
3. To all life thou givest, to both great and small; / in all life thou livest, the true life of all; / we blossom and flourish as leaves on the tree, / and wither and perish but naught changeth thee.
4. Great Father of glory, pure Father of light, / thine angels adore thee, all veiling their sight; / all praise we would render, O help us to see / 'tis only the splendor of light hideth thee.